

野本寛一先生が文化功労者として顕彰されました

胡桃沢 勘 司

近畿大学名誉教授・民俗学研究所第二代所長、野本寛一先生が、平成二七年度文化功労者として、顕彰されました。

野本先生は、昭和十二（一九三七）年、静岡県のお生まれです。昭和三四（一九五九）年に國學院大學文学部を卒業すると、郷里で教職を勤める傍ら、民俗学の研究に従事しました。顕彰発表の直前、平成二七（二〇一五）年九月刊行の『牛馬民俗誌』の「主著」には、昭和五九（一九八四）年の『焼畑民俗文化論』以来の、多数の著書が掲げられています。そのなかの一冊『生態民俗学序説』により、昭和六三（一九八八）年三月、筑波大学から文学博士の学位を受領しました。同年四月には、民俗学研究所助教授として近畿大学に赴任しています。民俗学研究所の開設と同時に着任したわけですが、当初の所員は、所長の谷川健一教授と野本先生の、お二人でした。平成元（一九八九）年三月、研究所紀要『民俗文化』創刊号が刊行され、野本先生は「熊野山海民俗抄」という論文を書いています。同年四月、文芸学部が開設されると、文化学科に在籍して、民俗学の授業を担当するようになりました。平成五（一九九三）年の教授昇進後は、文化学科長・文芸学部長補佐・文芸学部長代行・民俗学研究所長と、

多くの役職をこなし、近畿大学に多大な貢献をしています。平成十七（二〇〇五）年四月には特任教授となつて、平成十九（二〇〇七）年三月に定年退職いたしました。現在は名誉教授でいらつしやいます。

野本先生の学風は「徹底的なフィールドワークから得られた資料に基づき理論・体系を構築する」というものです。この考え方を御自身が語っているのは、『民俗文化』第八号（平成八―一九九六年三月）に掲載された「鼎談・回顧と展望―近畿大学民俗学研究所の八年―」においてです。先生は、ここで、民俗学研究所の研究態勢が、既存の枠組みに規制されないものであつたことから、自由にフィールドと向き合うことが出来、そこから独自の学問体系を積み上げつつあることを、示唆しています。これが「環境民俗学」として結実し、今回の高い顕彰に繋がつたと言えるでしょう。

民俗学という学問分野で文化功労者となつたのは、柳田國男（昭和二七―一九五二年）・本田安次（平成七―一九九五年）・谷川健一（平成十九―二〇〇七年）に続いて、野本先生が四人目となります。そのうち谷川・野本の両先生が近畿大学民俗学研究所長を務めており、民俗学でこの顕彰を受けた半数が研究所に在籍していたことは、我々現役所員にとつて、大きな誇りとするところであります。

平成二七（二〇一五）年十二月十五日（火）、文芸学部主催の快挙をお祝いする催しが開かれました。第一は、「環境民俗学への誘い」と題する、野本先生の記念講演会です。午後二時五十分から四時二十分まで、文芸学部棟三〇一教室で行われ、清水由洋理事長・塩崎均学長をはじめとする、二百人以上の聴講者で会場は埋めつくされましたが、野本先生の唄を交えた迫力満点のお話に、全員圧倒されてしまいました。第二は、シェラトン都ホテル大阪で、午後六時半に開宴した祝賀会です。塩崎学長の祝辞、清水理事長の記念品贈呈、北爪佐知子理事の花束贈呈、司会者（鈴木拓也教授）による祝電披露、野本先生の謝辞に引き続き、熊井英水理事の発声による乾杯で宴は始められ、参会の副学長・各学部長・文芸学部教職員が、心からのお祝いを申し上げました。

野本寛一先生が文化功労者として顕彰されました

野本先生におかれましては、今後、益々御健勝で、新たな研究成果を生み出していただき、後進を御指導くださいますよう、お願い申し上げます。

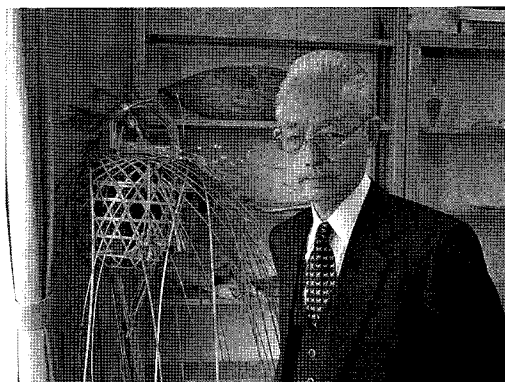


写真1 退職時の野本寛一先生（2007年3月20日、野本研究室、鈴木拓也氏撮影）

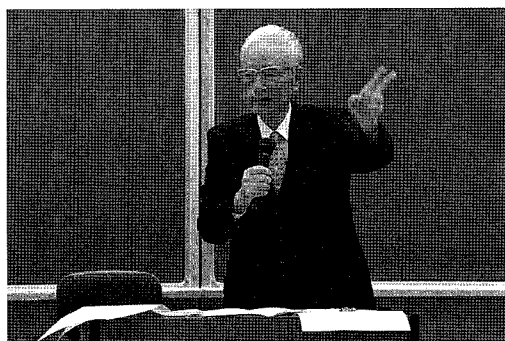


写真2 文化功労者顕彰記念講演会（2015年12月15日）